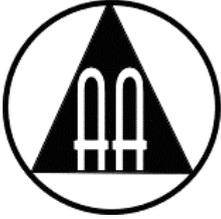


2009年2月20日

Alcoholics Anonymous



AA日本ニューズレター

NPO法人AA日本ゼネラルサービス (JSO)

No.134

特集：アノニミティについて考えてみませんか

AAの外部におけるアノニミティ

アノニミティ=無名であること=はAAプログラムの霊的基盤です。基盤というからにはしっかりさせないと全体が揺らいでしまうことでしょう。以下、AAの外部におけるアノニミティについて、WSM参加などで学んだことを分かち合わせて頂きたいと思います。

ご存じのことと思いますが、ただ「回復途上のアルコールリック」などと言うことは問題ありません。しかし伝統11にあるように「活字、電波、映像のレベルにおいてAAメンバーであると名乗ること」はアノニミティの原理に沿っていない、とみなされます。またそれだけでなく「AAメンバー本人がAAとの関連において本名フルネームを名乗る、もしくは本人とわかる写真が掲載されることも」同様に見なされるのだそうです。（“The Language of the Heart” P.16 未訳『ドクター・ボブと素敵な仲間たち』P.383）

なぜ外部において無名である必要があるのでしょうか？それには経験の集積から学んだいくつかの理由があります。（「無名性」「アルコールリックス・アノニマスはなぜアノニマスか」『AAの伝統が生まれるまで』）

第1にアノニミティを守らなかった仲間がスリップした場合、「AAとやらの効果は疑わしい」との誤解を世間に招いてしまうからです。メンバーだとは名乗らなくとも、公の場において本名フルネームでAAについて書いたり、語ったりしていた仲間がスリップしてしまった場合も同様の誤解を招いてしまうでしょう。

私たちのなかで再発の可能性がゼロと言うような“特別な”仲間はいません。ですから「こんな職業だ」とか、「こんなサービスの役割についている」などの“例外”を作ることなく外部では無名であることが賢明ではないでしょうか。場合によっては本名フルネームが必要とされる事があるかもしれません。その場合にはスリップの可能性が全くない、つまりはアルコールリック本人でないにも関わらずAAのために奉仕して下さっているA類理事の方々に私たちに代わってプログラムの希望を語って頂きましょう。

第2に外部に素性が明らかにされてしまう集まりにアルコールリックは参加したがりないからです。今も苦しんでいる仲間が、メンバーが顔写真などを外部に公表しているのを知ったら、恐れをなしてAAに助けを求めることができなくなることもあるでしょう。その仲間はそれから何年も地獄の

苦しみを味わう、そして最悪の場合は死を迎えてしまう可能性もあるのです。

第3に外部の問題に巻き込まれる危険性や党派性などを帯びているという誤解からAAを守ります。例えばある仲間がメンバーだと公言して禁酒運動など社会活動に関わっていけばAAもその活動に賛同しているとみなされかねません。またメンバーであることを公言する政治家が現れたとしたら、新しい仲間—特に反対政党支持者—のAAの敷居をどれだけ高くしてしまうことでしょう（どちらも実際にアメリカであったことだそうです...）。どんな信条、宗教の仲間でも抵抗なくつながれるようにするためには無色、つまりいかなる個人の色彩を帯びないことが肝心ではないでしょうか。

そして第4に個人よりも原理を優先させ、「霊的な意味において個人の名声を放棄している」という自己犠牲の精神は、この現代社会において惹きつける魅力があるからです。

目立ちたがり屋だったビルは、初期の頃、本名フルネームで公の場に出ていきました。しかし数々の失敗や伝統にも書かれているワシントン協会を始め過去に存在したアルコールリックの自助グループなどの先例から学び、「公の場において無名であることは私たちを危険から守る偉大かつただひとつのものである」ことを悟っていきました。そしてAAという共同体の永続のため、犠牲を払い続けました。例えば名門エール大学の名誉博士号を含め、もったいなくも6つもの学位授与の申し出を丁重に辞退しています。また雑誌TIMEの表紙（それも後姿）とカバーストーリーに、とのお話も短期的にはAAの良い広報となるだろうが、長期的にみて悪しき先例を作ってしまうとの判断からお断りしたそうです。（“Pass It On”（ビル W.の伝記）19章 未訳）

もう一人の共同創立者ドクター・ボブはそもそも目立つことを好まず、個人としての業績が賞賛されることを辞退し続けました。そのお墓にもAAの文字が刻まれるのを拒否しました。

ところで北米ではGSO（=日本のJSOにあたる）がアノニミティへの配慮のお願いのレターを報道関係者に毎年約八千から九千通も発送しているそうです。それでもメンバーであると公表している、もしくはAAに通っていると報道されてしまうセレブや、ネットのリカバリー分野のページでAAとの関連とともに顔写真を掲載している仲間が見受けられます。アノニミティに反すると認識のない場合もありますので、地域の評議員がその仲間や報道関係者に連絡を取りアノニミティに配慮して下さるようお願いする、もしくはGSOの広報担当からレターを出すなどの対応をしているそうです。

日本のAAも来年35周年を迎えます。AAの希望の輪を

さらに広げていくために、今一度、アノニミティへの認識を新たにし、霊的な基盤を強固にしていこうではありませんか！

WSM 後期評議員 まさよ

先般の常任理事会に於いて、ニューズレター担当理事から「AA 出版物の中から『アノニミティ関連の記事』抜粋」の要請がありました。

以下は、AA 書籍の中で明文化されているものの抜粋です。

アノニミティの理解を深める一助となりました幸いです。

AA 日本出版局

『ビルはこう思う』P.198 より抜粋

世間に公表する？

時に、世間に名前をよく知られた AA メンバーが、「もし私が AA のメンバーだと公表すれば、AA メンバーはもっと増えるだろう」と言います。こういう人たちは、AA のアノニミティの伝統は間違っている——少なくとも自分たちに関しては——という信念を表明します。

彼らは、飲んでいたころ、名声や世俗的な野心の達成が第一の目的であったことを忘れてしています。アノニミティを破ることで、無意識のうちに古い危険な幻想をもう一度追及しているのだということを、彼らは理解していません。アノニミティを守るということは、しばしば権力や名声や財産に対する欲望を犠牲にすることを意味しているのだということを忘れているのです。もし、このような欲望の達成が AA の中でふつうに行われていたら、AA の歴史全体が別物になっていたでしょう。つまり、共同体を破滅させる種を、私たちが蒔いてしまっていたはずです。アノニミティを破る人たちは、このことがわかっていないのです。

多くの仲間がこのような誘惑にさらされていますが——私もその一人でした——アメリカでは公共のメディアのレベルで実際にアノニミティを破る人はほとんどいない、とここに記せるのは幸いです。

『ビルはこう思う』P.278 より抜粋

恐れなしに声を上げる

私たちは、日々人とのかわりを持つかぎり、名前を明かさないうわけにはいかない。日常レベルでは、AA のことを友人や同僚に知ってほしいし、AA のおかげでどうなったかもわかってほしいから、自分の無名性(アノニミティ)を手放すようにしている。また自分がアルコールクだと認めるおそれもなくしていきたいと考えている。記者の方々にはメンバーの名前を明かさないうお願いしているが、私たちは、多くの人が集まったところでたびた

び話をする。それは、アルコールイズムは病気なのだから、その病気のことを人前で話すのを恐れていないと、聞いている人たちに知ってほしいからだ。

しかしながら、みんながこの限界を何も考えずに越えていったなら、私たちは間違いなく、無名にとどまるという原理を、どこかへ永遠に置き忘れてしまうことになるだろう。AA メンバーがみな、自分の名前も写真も体験談も自由に公表するのは構わないと考えるようになったら、たちまちみんなが競争して自分を売り出すことに熱狂し始めるだろう。

いわゆるパブリック・ミーティングというものを、たくさんの AA メンバーが疑問視しているようです。しかし私自身は、アノニミティが記事のなかで尊重され、また私たち自身が AA を理解してもらうこと以外に何も求めないのであれば、このようなミーティングを開催することに賛成したいと思います。

『ビルはこう思う』P.255 より抜粋

より広い理解

さらに多くのアルコールクに手が差し伸べられるように、AA への理解や社会一般の AA に対する好意があちこちで広がっていかねばならない。そのために、私たちは、医療、宗教、雇用者、行政、裁判所、刑務所、精神病院、そしてアルコール分野で仕事をしているあらゆる人たちともっと良い関係を築く必要がある。また、編集者やライター、テレビやラジオ関係者のよりいっそうの好意も必要としている。だから、こうした広報の窓口はいつも広く開かれていなければならない。

現代の巨大化したマスメディアを、私たちがどのように活用するかということほど、AA の将来にとって重要な課題はない。利己的な目的ではなく、これらを上手に活用できれば、現在想像する以上の成果を生み出すことができる。

もし、この優れた媒体の使い方を誤れば、私たちは自己顕示欲によって粉々になってしまうだろう。この危険から私たちを守るものが、不特定多数の前では個人名を伏せるという AA のアノニミティである。

『ビルはこう思う』P.160 より抜粋

理屈屋と、控えめな人

私たちアルコールクは、世界一の理由づけの大家である。AA のためにとても良いことをしているのだという言い訳で自分を正当化して、アノニミティを破り、個人的権力と地位、名誉、金のために、昔ながらの悲惨な追及を繰り返すのだ。この飽くことを知らない衝動は、かつてはその挫折が私たちを酒に走らせた衝動と同じものなのである。

ドクター・ボブは私より本質的にはるかに謙虚な人物で、アノニミティについても比較的楽に受け入れていた。彼の病気がはつきり致命的だとわかったとき、彼の友人が何人かで、彼と彼の妻のアンをたたえ、創始者とその夫人にふさわしい記念碑をつくるべきだという提案をした。この話を私にすると、ドクター・ボブはおおらかに笑っていた。「神の祝福あれ。彼らは良かれと思っているのだ。だが君も私も他の仲間とまったく同じように埋葬してもらおうじゃないか」

ボブとアンが眠るアクロンの墓地にある質素な墓石には、AAのことは一言も書かれていない。自己の影をとどめないというこの究極の手本は、どれほど世間の注目を集めることよりも、どんなに大きな記念碑を建てることよりも、AAにとって永久に消えることのない価値なのである。

『ビルはこう思う』P.241 より抜粋

中庸(ちゅうよう)

AAの中には、途方もなくアノニミティを徹底させているところもあります。そのメンバーたちのコミュニケーションはとてども乏しく、お互いの本名や住所さえ知らないほどです。まるで秘密結社のようなものです。

一方、まったく逆の現象が起きているところもあります。大物を装って、注目を集めようと「遊説」に出かけ、市民を前にしてがなりたてるAAメンバーを制止するのに一苦勞します。しかし、このような両極端から徐々にその中間を行くようになるものなのです。たいていの遊説講演者たちは長続きしませんし、スーパー・アノニマスを通していた人たちがやがて隠れ家から出てきて、AAの仲間や職場の同僚やその他の人々と普通のかかわりを持つようになります。長期的に見れば、ちょうど中庸に落ち着いてきます。おそらくそこが私たちのいるべき場所なのでしょう。

『ビルはこう思う』P.299 より抜粋

アノニミティとソブラエティ

AAグループの数が急速に膨れ上がるにしたがい、アノニミティ(無名性)の問題も急速に増えていった。仲間の劇的な回復に熱中するあまり、その仲間がスポンサーだけに話した極めて個人的で悲惨な側面まで、みんなの話題になることもしばしばあった。権利を犯された被害者たちは当然のことながら信頼が裏切られたと申し立てた。

そのような話がAAの外部にまで広まると、無名にとどまる保証に対する信頼は失われ、そのために人々から背を向けられたことが何度もあった。各AAメンバーの名前も——その人が話したことも——その人が望まないのなら明かしてならないことは明白だった。

公共の場で個人の無名性を百パーセント守ることが、AAの生命の核心であること、それはちょうど各メンバーにとって百パーセント飲まないで生きることが肝心なこととまさに同じであることを、私たちはいま、充分認識している。これは私たちが怯えているからなのではない。長い経験から教えられた賢明な声なのである。

アノニミティや

ステップについての自分の経験

最近自分のニックネームを本名の苗字に戻しました。ゼネラルサービスの活動をいったん終えたのでふつうは逆なのか

もしれませんが、仲間がWSMに参加してきて「本名以外の名前を採用しているのは日本だけ」というのを聞いてのことです。ぼくがAAにつながって以来長年名乗ってきた「キヨシ」というのは本名ではありません。好きだったロック歌手の名前の一部です。あの団塊世代の「愛し合ってるかい? イェーイ!」って皆さんも聞いたことがあるのでは?

今回のこのぼくのAAネーム変更には、先行くAAの国々(とくにアメリカ・カナダ)ではこのようにしているので日本もそれにならう、という考え方がありました。「日本も」というと大げさですので、ただ単にぼくがそれを取り入れたかったというだけのことです。でも日本のAAを作ってきた先行く仲間たちが「AAでは自分の好きな名前を名乗って、本名を使わなくてよい」ということを述べ伝えてきて、ぼくはそれに忠実に従っていたわけですが、ぼくはそうに聞きましたがもともと正確にはそうでなかったのかもしれないし、何年も仲間から仲間へそのアノニミティの考え方が伝えられているうちに変化してしまったのかもしれない。でも誰がどこで間違ったのかを追及するのは生産的でないと思います。今回の全国評議会でもそういう議論が出そうになりました。それはわれわれアルコールクの得意な「犯人探し」「まちがい探し」「違い探し」に発展しがちだからやめたほうがよいように思います。

同じようなことが基本テキスト「アルコールクス・アノニマス(ビッグブック)」を使ったステップの踏み方の普及の中で、起きていることを感じます。ぼくはこれまで15年間のソブラエティの中で、仲間から伝えられたステップを「12のステップと12の伝統」を使って踏んできました。1,2,3に時間をかけ、ライフヒストリーをくまなく書く4をやり、言いばなしの5を丸一日かけて黙って聞いてもらい、日々の6,7、そして絶好球が飛んできたときに自然に8,9をやり、日々日記を書き(10)、喜びや苦しみの中で祈り(11)、スポンサーを募集しながら新しい仲間と毎日ミーティングを歩いています(12)。今も毎日1,2,3ですので毎日ミーティングに出て、ホームグループでは12&12を輪読してのミーティングを毎週行なっています。これは多くの先行く仲間から言われたとおり、自分の考えを使わず実践してきたことです。新しい仲間にもそう言っています。自分の経験から早すぎる4,5や8,9はよくないとも言います。ステップ一つを一年ずつかけるくらいでちょうどよいとも。これらのことが間違っているとはまったく思いません。伝聞や説教ではなく、自分の経験をそのまま伝えているに過ぎないからです。

最近ビッグブックを使った12のステップの踏み方を仲間から教わり、自分でもやってみました。そちらのやり方「も」、新しい仲間伝えることをはじめています。やり方やスピードがかなり違うということを感じました。そして旧来のやり方と違った効果があるということも実感します。長年の恨みつらみや恐れがかなりの部分消えて楽になったからです。なかなかできなかった傷つけた人のリスト作りもさらさらと自動的にでき、これからどのように大人としての埋め合わせをするかもスポンサーと話し合いました。自分の荷物だけ下ろして楽になるわけにはいかないので、これは一生の課題だと思えます。ステップの踏み方や実践方法は違いますが、ベースにある考え方は同じだし、自分がこれまで経験してきた12&12でのステップとも互換性があると思えます。

仲間のみなさんに気をつけて欲しいのは、過去のやり方や自分がやっていない他のやり方を否定しないでほしいと

いうことです。否定されれば人間ですから反発します。反発すれば足を踏み、踏まれたほうはまた踏み返す、というまさにテキストに書いてあるような混乱が生じるわけです。AAのプログラムは愛と共感が中心にあるべきだと思います。どういうステップの踏み方をするかでお互いが論争したり正義を主張するなんていうことはこっけいです。アル中には一流も三流もありません。ときにはこのことで地域や地区の中が分裂してしまう(しまった)という話も聞きます。一度壊れた人間関係を修復するのは時間と労力がかかります。しらふでしかもAAの中で新たな傷つけ合いはやめませんか? 身近に12ステップの論争や、他のやり方を批判したり嘲笑したりするスピーカーを聞くたびに、日本のAAが分裂しなければいいかと心配性のぼくは気が気でなりません。

アノニミティの述べ伝えも、ステップの述べ伝えも、アメリカカナダのオリジナルと違う面が日本のAAで発展してきたのは、国民性や文化が違うので当然ともいえます。われわれの一体性が試されている場面と言えるかもしれません。歴史は過去の否定に成り立つものだし物事の改善には痛みをともしませんが、少なくともわれわれが争っているのを見たばかりに新しい仲間が離れていくような事態がないように祈っています。

関東甲信越地域 荻窪 Gr 森田(前 B 類常任理事)

ささやかな経験

宮城 露野

私が経験したアノニミティについて以下書いてみたい。

TCOでの仕事を続ける中で、多くの仲間、専門家、関係者、家族などとの出会いが与えられ、TCOでのボランティアの仕事の大切さが少し分かり始めた頃、ある仲間と路上ですれ違った。声をかけて挨拶をした。その時は何事も無く別れたが、後日その仲間から抗議を受けた。「ミーティング場以外では他人だ、しらんぷりをしろ」との叱責であった。

それが正しいかどうかではない、それもまたアノニミティというAAの原理が理解できないまでも受け止めるチャンスが与えられた。

それからしばらくしてもう一つのチャンスが訪れた。それは仙台のあるラジオ局からAAを知りたいという取材申し入れだった。TCOにとっては初めての経験である。しかも生放送であり受けるとすればTCOしかない。経験を伝えることができるのはAAメンバーだけである。地区、地域、運営委員会で話し合ったが受ける方向での確認は出来たがインタビューを受ける仲間が決まらず私ということになった。

飲まない時間が4年足らず、先ゆく仲間がいたにも拘わらずである、断れば済むことであるが、たまたま読んでいた「成

年に達する」のメディアとの関わりがおもいおこされた私にも出来るかな、等と考えはじめていた。(有名病の兆候無きにしても非ずだったかも)

そうこうしているうちにラジオ局から担当者が来所し打ち合わせが行われた。インタビューは電話、あらかじめ質問項目を決めた5分程度の番組ということであった。

インタビューを受けるのは私しかいないのかというこだわりは、放送当日まであたしの中にあつたが代わろうという人は現れなかった。あのときの緊張感と不安は今思い出してもぞっとするが反面ある種の誇らしさがあったことも確かな気がする。

いよいよ放送がはじまった、周りに職員ほか何人の仲間がいたのか覚えていない状態で、とにかく受話器の音を待った。最初のアナウンサーの第一声は何だったのか、私がどう答えたのか覚えていないが、「お名前は」と聞かれて「ジョニーです」と答えた後、「外国の方ですか」と問われ『日本人です』と答えたことだけは今でも鮮明に覚えている。他に何を話し答えたのかは後日送られてきたテープを聞き、先ゆく仲間へ伝統との関連を検証して貰ったが、可もなし不可もなしということであった。そのテープがのこっていないかどうか探してみたが残念ながら見つからなかった。

しかし、これで終わらないのがAAである。後日次のような提案が仲間から提案された、

1. AAがラジオ出演のような公の場でできること
2. たとえニックネームであってもAAメンバーとして公の場で話をする

は伝統に反するのではないかと、ということであった。これもまたアノニミティの一つの考え方である。言い換えるとそれぞれのソブライエティがAAをどう受け止め、自分のプログラムをどう生きるかにあると考えるが議論のつきない問題である。

その後、オフィス取材だけでなくグループ直接取材も増え、特にテレビ局のミーティング参加なども行われ、撮影は背後からのみで受け入れたり、新聞社の取材にはニックネームで応じたりとそれぞれが工夫してきてる。背中だけでもいやだ、たとえニックネームでもミーティング以外で話したくない、という仲間は今でも大勢いる。それでいいと思う。

その後、高校、大学、関係者の集会等でメンバーが話をする機会は多くなってきている、私も参加する機会を与えられているが、ジョニーの名で通している。

評議員のとき、或いは今回のような文書の署名のとき、市民生活のときだけは本名である。『ジョニーです』『外国の方ですか?』 私にはこれが楽である。

私のささやかな経験がアノニミティをどこまで語りえたか分からんが、改めて「ビルはこう思う」のビルの言葉と向き合う機会をもらった。感謝

編集・発行： NPO 法人 AA 日本ゼネラルサービス (JSO)

〒171-0014 東京都豊島区池袋 4-17-10 土屋ビル 4F Tel:03-3590-5377 Fax:03-3590-5419

<http://www.aajapan.org> aa-jso@cam.hi-ho.ne.jp

(月一金) 10:00-18:00 (土・日・祝) 休